
怪盗 J

櫻川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗J

【Nコード】

N5375N

【作者名】

櫻川

【あらすじ】

変人ばかりの集うサークルがメイン。

A

「愛が欲しかったので、参上しました」

そんな文字が書かれた紙を机の上で発見して、わたしはその紙を手取る。

新聞の文字を一字一字、丁寧に切り取ったらしい歪な文字。まるで怪盗の予告状みたいだ。まあ、未来じゃなくて過去なのだろうけれど。

「ハル先輩、これなに？」

「知るかよ。怪盗じゃねえの？」

振り向いて、一步下がった場所にいるピンクの髪をした男に聞くと、端正な顔をした男はそう答えた。

「小さい南？」

「ライバルだろ。つか、その例え、わかりにくい」

「ハル先輩、わかったじゃん」

「それは俺だからだろ」

苦笑を浮かべるピンク男。答えが正しいから文句を言えなくてもむかつく。だから「ピンク変だね」って言ってあげた。すると、ピンク男は「うつせえよ」と笑う。そこ笑うとこじゃないよ、先輩。

「ハル先輩、これどうするの？」

「知るかよ。お前がどうすんの？」

「なにが？」

「なにがじゃねえよ。ここはお前の家で、お前の部屋で、お前の机で、これはお前宛ての紙だ。なあ、そうだろ？」

「うん、まあね」

「だったら、どうするかはお前が決めることだ」

俺は知らねえよ。

ピンク男はそう言って、あくびをする。

確かに電話をかけて呼び出したのはわたしだけど、先輩は適當過ぎ。好きでこんな手紙見つけたわけじゃないのに。だけど、理にからってるからなにも言えない。

「ピンク変だね」

「お前は不都合になると、いつもそれだな」

「ピンク変だね」

「変じゃねえよ。似合ってるって言え。嘘でもいいから」

「ピンク似合ッテルネ」

「片言で言うんじゃねえよ。嘘でもいいって言ったけど、そんなわかりやすい嘘つくな」

「ピンク変だね」

「はいはい、わかったわかった」

呆れたように笑うピンク男。

むかついたから右手をグーにして伸ばす。むかついたけど本気でむかついたわけじゃないから、簡単にその拳をピンク男に掴まれた。筋力の差なんかじゃない、絶対。だってパシンって軽い音だったから。絶対、違う。

「で、どうすんの？」

「んー、探す。これ送ってきたの誰か」

「……心当たりねえの？」

「ねえです」

「あっそ」

またもや苦笑するピンク男。

そして掴んでいた手を離して、わたしの頭をうりうりと撫でた。

「よし、行こう」

ピンク男はそう言って、目を三日月形に細めて笑う。

不覚にもかっこいいその笑顔にむかついたので、頭の上にある手を払ってから小さく頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5375n/>

怪盗 J

2010年10月9日23時19分発行